

# 史もやま話

## 近頃のお葬式に思うこと

新型コロナウイルス感染症への対応が長期化する中、コロナ禍にてお亡くなりになられた国内外の多くの方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、罹患されている皆様へ心よりお見舞い申し上げます。また、感染リスクの危険のなか、治療にあたられている医師、看護師を始めとする医療従事者の方々に深く敬意と感謝を表します。

世界的な流行となったコロナウイルスについて、日本と欧米の対処方法・考え方について、違いがあるようです。日本は「ウイズ・コロナ」と言い、欧米は「封じ込め」と云う。自然とともにある農耕民族と自然を克服した狩猟民族の違いと云ったところでしょうか。

さて、コロナウイルス感染症の広がりにより、葬儀・法事など寺院を取り巻く環境や生活習慣も激変しました。ウイズ・コロナの環境で少しずつ始まっていた葬儀・法事の簡略化が一気に広がっています。

生ある者には必ず死が訪れます。諸行無常・生者必滅・会者定離はこの世の定めです。人が亡くなると、後に残った親しい人々が集まって葬送の儀を営みます。故人の歩んだ人生に相応しい、深い思いを込めて出来るだけ丁寧に営み、最後のお別れは心から故人を偲びます。お釈迦様も父・浄飯王の棺を担がれたといわれています。

人類は文化を持ち始めた頃から死者を手厚く葬ってきました。柔らかい上質の草で編んだ敷物の上にご遺体を安置し、草で編んだもので覆ったことから「葬」の字が出来たと云われています。

最近では少子化高齢化社会への対応や特に昨年からコロナウイルス感染症拡大防止の諸対策と相まって急激な社会の環境変化が起こり、お葬式の形式も大きく変わり始めています。家族葬、直葬、一日葬、炉前葬などと呼ばれる今までに無かった形式が増え、人との接触を避ける非接触型という簡素化が進んでいます。簡素化だけが進んで良いものなのでしょうか。葬儀後に訃報を知った方々への対応や連絡しな

かった親戚や友人知人の対応などに苦慮されるとも聞きます。

昔はどこでもサンマイ(三味)で葬儀(葬儀式)と火葬(荼毘式)を行う、野辺送りをしました。そこは生から死への厳粛な儀礼の場でした。近頃は葬儀場や火葬場も立派になり、お葬式は流れ作業のように次第に則って進行していきます。「こんなお葬式は楽で良いけど、涙が出ませんね。」とおっしゃる方が増えています。

お葬式に併せて唐辛子汁や赤飯などを準備し、仏に成らせていただくことを慶び、涙することが三重県北勢部の真宗門徒の特徴でしたが、それも無くなりつつあります。

ウイズ・コロナの時代を迎え、社会全体が大きく変化し、私たち寺院の在り方にも影響を及ぼしています。葬儀や法事の形式がコロナ禍以前のような、従来から行っていた形式には戻らないと考えて対応しなければなりません。人と人の密接な繋がり(三密)が仏教の本質であり、葬儀・法事でありましたが、コロナウイルスの防止には、「三密」を避けなければなりません。葬儀・法事の縮小が目立っています。

寺院の活動はこの密接な繋がりを守ることを「どう補うのか」が課題となりますが、逆に門徒さんを始めとする多彩な人々との繋がりが寺院の強みでもあります。拙寺では法事やお葬式などは「お寺でどうぞ」と積極的に奨励しています。講演・サークルなど多彩な活動の拠点として提供することを目指しています。

また少子化高齢化の次に、高齢者の核家族化・老々介護・死亡年齢の高齢化・一人暮らしの高齢者の増加などもお寺の門信徒を取り巻く環境としてウイズ・コロナと共に考えなければならない問題です。

今後の葬儀は個人を単位とするところまで行くのか、或いは家族には拘らない新しい社会関係を見つけ出すのかは、まだ見通せません。いずれにせよ、三人称の死として葬儀に参加し、二人称の死を喪主として参加し、最後は一人称の死として葬られる本人となることには間違いありません。

この世のいのちが終わるとき、阿弥陀如来の本願力によって、直ちに極楽浄土に往生させていただいて仏となり、あとに残った人々の心に還ってきて、人々を導きます。葬儀を通して一度でも二度でも多く、掌を合わせお念仏することができるのは、すべて故人の導きによるものなのです。

葬儀は別れを告げる告別式ではなく、先に往く人も後に残された人もみな同じ仏となり必ず阿弥陀如来のお浄土に往生生まれるのです。この私も諸行無常の身であることを知らされ、死とともにあるいのちであることを教えられ、永遠の別れではなく、また会わせていただく「いのち」と受け止め、ありがたい感謝を表し仏徳讃嘆しましょう。

合掌

藤井純恵 二十五日講長(浄円寺)

## 寺院紹介 浄光寺(桑名市赤尾)

### ある日の「浄光寺 おてらこども食堂」

浄光寺の現在の所在地は桑名市であるが、旧員弁郡久米村であったので、員弁組に所属している。2019年6月より、「子ども食堂」を始めた。ある日の「浄光寺 おてらこども食堂」を中心に紹介したい。

～浄光寺ブログより～

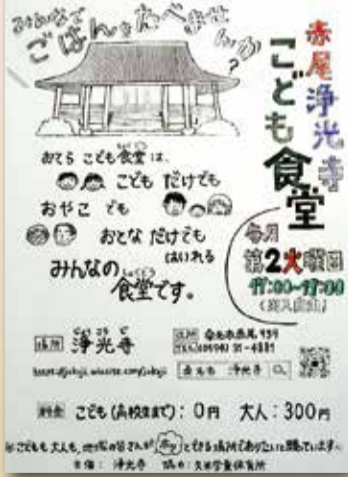
第2回(7月23日)

食事を通してお寺がみんなの居場所になってくれたら!

午後5時前一番乗りした子ども達と一緒に、第2回目の「おてらこども食堂」の始まりの時を知らせる梵鐘を撞いた。

時間が経つにつれて席が満席になり、受付で少し待っていただく状態となってきた。そして、食事が終わった人たちが、境内に出てそれぞれの場所でくつろぎはじめる。お年寄りはベンチに座って談笑し、子ども達は、ボールやバトミントンで遊んでいる。総代さんが、「御堂の縁側から、境内地できつろいでいる人達を数えたら、50名にもなった」と言ってくださった。

食事を通してお寺がみんなの居場所になってくれたらと願い、



この活動を始めたが、まさにその様を目の前に見



仏さまへご挨拶

せてもらい、坊守と感激する。今回の参加者は、子ども44名、大人30名。キーマカレーは、めでたく完売!「おいしかった。レシピを教えてください」との声に、「えーと、タマネギのみじん切りバケツ一杯、挽肉4キロ!」家で何の役に立つの!?!」みんなで大爆笑。スタッフ一同、そのキーマカレーを食べられず残念無念。しかし、うれしい結果でした。

第6回(11月26日)

大人の参加が4割近くある

今回の参加者は、子ども50名と大人33名の計83名。前月よりも、ゆっくり過ごしてもらえたように思う。キッズサンガの卒業生が、友達を連れて顔を見せてくれるのも喜びの一つ。スタッフも、皆さんとおしゃべりができ楽しいひとときだ。そして「おてらこども食堂」と名前をつけているが、大人の参加が4割近くあるのも特徴の一つと思う。近所のお年寄りが来てくれているからだ。来た人にはまず、本堂に上がりお寺のご主人である仏さまへご挨拶するようお願いしている。中には、ご挨拶に加えお経をとらえている方もみえる。そして、食事の前後には、「食前の言葉」「食後の言葉」を唱えてもらう。初回から参加してくれているスタッフのお孫さんは、家でままごと遊びをするときに「食前の言葉」らしきものを唱えているとのこと。こんな嬉しい話を聞くと、坊守と子ども、疲れも吹き飛び元気がわく。

残念ながら、現在はコロナの蔓延でこども食堂は休止している。早く開催できるように願う。

石本龍憲 (浄光寺)



スタッフ



コロケと猪肉のトマト煮 (第4回食堂)



食後のくつろぎ



食事風景

「浄光寺ホームページ」

<https://www.jokoji-kuwana.com/>



桑名の老舗 仏壇・仏具・お洗濯

# 福井屋

白い象が目印

寺町本店 新西方法店 明電工場

代表 0594-22-3121

団体参拝から個人旅行まで 旅のご用命は 観光庁長官登録旅行業第55号 (一社) 日本旅行業協会正会員

## 名鉄観光サービス株式会社

津支店

津市栄町3丁目141-1 モアビル5階

電話 059-225-7676 本願寺担当者: 佐藤 篤

- 運動具
- 事務用品
- 学校教材教具
- 開運印・実印
- 銀行印・認印

しまや

## (有) 嶋屋

いなべ市北勢町阿下喜

TEL72-2151 FAX72-3436

inabeso